拝啓　黄巾族へ　（正臣夢?長編

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
拝啓　黄巾族へ　（正臣夢？長編

【Ｎコード】
Ｎ０２１１Ｍ

【作者名】
峰春秋人

【あらすじ】
紀田正臣を愛す罪歌の子供と紀田正臣の起こすちょっとしたせつないラブストーリー。
結ばれるのそれとも・・・壊れちゃうの？

第一話　私方向音痴なんです（前書き）

なんか不安だぜ☆

第一話　私方向音痴なんです

正臣は肘をついて校庭をぼけーっと見ていた。
もう半分眠りかけている状態だった。
目の下にできたのは影なの？それとも・・・・くま？

「ーだくん。きーくん！紀田くんってば！」

肩を揺らされて正臣の視界がゆがんだ。そして一。

「バタン！」

勢いよく肩を揺らした少女のほうへ正臣が倒れた。
頭は打たなかったが肩を殴打した。
が、正臣自身床に倒れた瞬間にその解放感がうれしくて眠ってしまった。

「き・・・紀田君？紀田くん！！」

揺らした少女は自分が正臣を怪我させたと思って一人テンパっていた。
先生が駆けてつけてきて一緒になって慌てる。
結局正臣は起きずそのまま保健室行き。ついでにその少女も付き添いで行った。

保健室の薄い白いシーツにくるまった正臣をつつむ温かい日の光。
その横には長い黒い髪の毛を下のほうで結った少女が落ち着いた様子で座っていた。

先生は職員室に行っているから二人きりだった。
少女は髪の毛を耳にかけたり、前髪を横に分けたりとやたら髪の毛をいじっていた。
正臣は小さな寝息を立てて気持ちよさそうに眠っていた。
静かに流れるときの中で二人のその行動はあまりにも・・・似会わなかった。
明らかに他人と言った空気をまとっていて二人がどうせ一緒にいるのか謎だった。

「・・・紀田正臣。」

小さく少女がつぶやいた。
けど、だからと言って正臣が起きるわけでもなんでもなかった。
つぶやいただけ。

しばらくして正臣が起きた時には少女は居なくてかといって置き手紙も何もなかった。
まぁ、正臣は人がいたなんて知らないから気にしないでその場を立ち去った。

「正臣。大丈夫？」
「倒れたって言ってたけど・・・。」

心配そうに正臣の親友である帝人と杏里が聞いてくる。
けど、いつもの明るい声質とスマイルで正臣は二人の心配を吹き飛ばした。

「だいじょーぶ！心配いらないよ。」

帝人も杏里もそれを聞いて安心をする。

すると、正臣のズボンのポケットから音が鳴りだした。
みんなの視線がそこにいく。
正臣が携帯を取る前にそれはプチっときれてしまった。
その瞬間正臣が眉間にしわを寄せて手をすっと元の位置に戻した。

「悪いんだけど・・・用事が出来ちゃった！」

そういうと二人の返事も聞かないまま正臣は西口公園の人ゴミにきえた。

「・・・紀田君。最近忙しそうですね。」
「うん。目の下にくまあったし大丈夫かな？」

二人の親友は互いに親友のことを心配しながらも正臣を見送った。

「なんだ。電話するなっていっただろ？」

さっきとは違う威圧感のある声を出して正臣は電話の相手に怒った。

「いや！緊急なんですよ！早く来て下さい！」

助けを求める男の言葉に正臣は渋々返事をすると携帯電話を切った。
そして、駆け足で裏道からいつもの倉庫へ向かった

「で・・・こいつが入り込んでたわけ？」

と一人の部下が一人の中年じみた男に言った。

「は・・・はい。この女がいたんです。」

と言って若い男が中年じみた男ー法螺田が連れてこられた女を見つめた。
赤茶色の髪の毛を上で束ねてポニーテールにしてからそれを団子にして簪をさしている。
目は目隠しで隠されていてみえない。
小顔で小柄な体つきで足と腕は結構細い。しかも白い。

「あの・・・離していくれませんかー？」
「何しに来たんだ？ここに？」
「だから、迷子になったって言ってるじゃないですか！」
「嘘つけ！どこの偵察だ？ブルースクエアーか？」
「すいませんけど・・・ブルースクウェアです。」

間違いを指摘されて法螺田は血管を浮き上がらせた。
ほかの者たちが小さく笑う。

「この！！」
「やめろ！」

一人の男の声で法螺田の腕が止まる。
ほかのみんなも動きをやめてそちらに目を移す。
金髪に黄色いスカーフを付けた子供。

「リーダー・・・。」
「そいつがここに入ってきた奴か？」
「はい。裏にいたところ捕まえまして・・・。」

一人の男が前に出てきて説明した。
女の子がさっきまで動いていたのに動きを止めていた。

正臣はゆっくりと近づいて女の子の目にかかっていた目隠しを外した。
女の子はしばらく目をつぶったままだった。
でも、ゆっくりと目を開いた。
その瞳は紙の色とは対照的なブルーだった。

「どーも。君はなぜここに？」

笑いながらけどその目は冷酷だった。
女の子はしばらく口をつぐんでまじまじと正臣を見つめていた。
不思議そうに眼の奥底を穴が開いてしまうかもと思うくらいにじっとじっと・・・。
正臣も一緒になってその目を見つめてしまう。
その青い目にどんどん吸い込まれていきそうになってついに正臣は目を離した。

「あ！私迷子になったんです。」
「・・・どこに行こうとしてたの？」
「ここら辺に露西亜寿司ってありませんか？」
「露西亜寿司ねぇー・・・。ここの正反対だけど。」

呆れた正臣を見て女の子はにっこりと笑って

「私方向音痴なんです。」

と自慢げな感じで言って見せた。
正臣は彼女がブルースクウェアの偵察係とは思えなかった。
純粋で悪いことなんかしてない感じだったから。
何よりその笑顔が何もしてないことを現していた。

「・・・離してやれ。」
「え？」
「こいつを露西亜寿司まで送ってくる。」
そういって離された少女の手をつかんで正臣は倉庫から姿を消した。
なにも文句を言うものはいなかった。
けど、不満を抱くものはいた。
「殺せばいいのに！」
そう怒鳴ってから法螺田はその場を去った。

正臣はしばらく裏道を歩いて行きながら露西亜寿司を目指した。
思わずスカーフをつけたまま来てしまった。
今の格好と状況で帝人や杏里に見つかれば正体がばれてしまう。
「露西亜寿司ってもうすぐ？」
「ああ。ここをまっすぐ行けば付くよ。」
「なら！いいよここまでで。」
少女は言って足をゆっくり止めた。
正臣は不思議がって首をかしげた。
「あなた・・・誰かに見つからないように裏道を歩いてきたでしょ？」
「！！」
図星。それだけ。

なのに少し焦って何が起こるのかと身構えた。

「だから、ここまでいいよ。もう道わかるから。」

にっこりと笑うと少女は急ぎ足で裏道から出て行こうとした。

路地を曲がろうとしたところで少女が正臣に白い歯を見せながら言った。

「私の名前は罪鬼乃(つみきの)。変な名前でしょ？でも私は自分の名前が好きよ！じゃね！！」

路地の向こうに罪鬼乃の赤色めいた茶髪が消えて行った。

しばらくの間正臣の頭の中では「罪鬼乃」という言葉が回っていた。

不思議な少女ー罪鬼乃。

「つみきの・・・。」

そう呟いて正臣はその場を立ち去った。

第一話　私方向音痴なんです（後書き）

罪鬼乃って・・・変なのｗｗ

第二話　珍しい名前ですね（前書き）

あー頭が痛いＺＥ☆
もうすぐ期末試験ｗｗ

第二話　珍しい名前ですね

昨日の少女・・・罪鬼乃といったか・・・。
彼女のことが頭から離れない。

「私方向音痴ですから。」

あの状況でこんなのんきなことを言って笑った時の彼女の笑顔が正臣の心を動かした。
「好き」かと聞かれると違うけど頭から離れないのは確かだ。
同じポーズで同じ角度で今日も正臣は校庭を茫然と見つめる。
彼女のことを少し思い出しながらくるくると頭を回転させていた。

「紀田君。大丈夫？具合悪いなら保健室行けば？」

いきなり声を掛けられて正臣は肩をビクつかせた。
苦笑いしながら小さな声で「大丈夫。」と言ってまた外に目を戻す正臣。
声をかけたのは学級委員の東海堂聖那（とうかいどうせいな）だった。
心配そうに聖那は正臣を見つめた。
手元にあったノートに視線を落としてそのままじっと眼を閉じて何か考えた。
そして、そのノートの端っこを破った。
その破ったところに小さな文字を書いていく。
出来上がった手紙を四角に三回ほどおると正臣の机へと投げた。
すると、ちょうど正臣の肘の下にあったノートにのっかった。

「きーだーくん！」

小さな声で正臣は呼ばれた気がして横目で聖那をみた。
聖那はジェスチャーでノートを指した。
その時点で正臣はノートの上に手紙があることに気付いてそれを開く。

「紀田君へ
大丈夫？ねむかったり疲れてたら学校を休んでもいいからね。
一人暮らしだし大丈夫かなって心配で。
あと、昨日は勝手に帰ってごめんなさい。
知らないと思うけど紀田君が倒れた時私が付き添ってたの。
用事があって帰ったの。本当にごめんなさい。」

正臣も知らなかった事実が書かれていて思わず目を見開いて聖那をみる。
こっくりとうなずく聖那はほほ笑んでいた。
急いで両手を合わせてお礼をした。
聖那は笑っていた。
そのあと、正臣は手紙に返事を書いて渡した。
聖那もまたまわして二人の手紙回しが始まった。
その手紙回しはスピードを増していって次の授業も次の日もずっと永遠に続いた。

一週間たった。
そろそろ手紙の量が正臣の部屋で目立つようになってきた。
小さい紙がたくさん発生してかばんにいっぱいになった。

ある日。
手紙を投げながら正臣は考えた。
（この手紙を捨てるのはもったいないからＢＯＸをつくればいいんだ。）
と思った。それを手紙載せて投げようとした。その時ー。

「キーンコンカーンコン。」

チャイムがちょうどよくなってお昼を告げた。
聖那はそそくさと友達と廊下へ行ってしまった。
この後授業はない。今しか言うしかなかった。
正臣は聖那を追って廊下にでた。そこから大声で名前を呼んだ。

「聖那！」

はじめてよんだ。
しかも呼び捨てで・・・。
廊下にいた何人かが正臣をみやってから聖那を見やる。
聖那本人は目をぱちくりさせて友達に何か話してからこちらに走ってきた。

「どうしたの？」
「あのさ・・・。手紙がいっぱいになってきたから箱を買ってそこに入れようと思うんだ。で、一緒に買いに行かない？」

ひそひそと正臣が話す。
聖那はそれを聞いてうなずくだけだった。
そして、

「じゃ、西公園で待ってるから放課後来てね。」

そういってまた友達のところへと走って行った。
（聖那と出かけるとなるとあの店がいいかな？）
などと色々と考える正臣。
一応真面目に女の子と出かけるのは沙樹以来だったから少し気遣っていた。
放課後まで時間はない。正臣の頭の中でくるくると計画が回った。

放課後。
来良の制服を着たまま二人は池袋の町を歩いていた。

「どこがいいなぁー？」
「ここら辺ってそんな小物店ってないよね。」
「うん・・・。あ。門田さん。」

映画館の隣にある駐車場ではいつものワゴン組がそろっていた。
また絵理華とウォーカーは電撃文庫の本を持ってはしゃいでいる。

「よぉ正臣。ん？彼女か？」

門田が首をかしげて隣にいた聖那に目を向ける。
正臣が否定する前に聖那が答えた。

「聖那っていいます。紀田君とは文通友達です。」

にっこりと笑った聖那をみて正臣はいつもの聖那とは少し違うなと感じる。
門田も少し口元をつり上げて聖那にあいさつしていた。

「門田京平だ。」

それだけしか言わなかったけど。

「門田さん。ここら辺に小物屋さんってありますか？」

聖那が大胆にもそんなことを聞く。
正臣は内心ひやひやいながら耳を傾けると、

「いや・・・知らないな。」
「あ！アニメイトに行けばたくさんあるよ！ねぇーゆまっち。」
「そうッスよ。」
「でも、アニメイトのはアニメのキャラいりでしょ？」
「そうだけど？」
「私達が探してるのはねー。」
「ああ！あのよくアニメとかでてくる箱？」
「そうそう！木製でアンティークの奴。」
「そうだったッスか。でも・・・ここら辺にはないっすよ。」
「そっか・・・。」

正臣はあっけにとられた。
自分だってついていけない会話の中にすんなりと初対面の聖那が入っていくなんて・・・。

「ならさ・・・作れば？」
「え？」

いきなり出された絵理華の案にすこしだけ聖那が首をひねる。
多分頭の中でいろんな箱のデザインとか考えているのだろう。
しばらくして目をカッと見開いて聖那がにっこりと笑う。

「それっていいアイデア！」
「でしょ？」
「有難う！えーと・・・。」
「絵理華。狩沢絵理華だよ。」
「有難う絵理華さん。」
「自分の名前は遊馬崎ウォーカーッス。」
「遊馬崎さんも有難う。ほら紀田君木材や探そう！」

そういって聖那は正臣の手を握って走って行ってしまう。

「青春だな。」
「だな。」

車の中から携帯をいじりながら渡草がいった。
それに一緒になって門田も混ざりこむ。

いろんなところを回ったけど木材が売ってるところなんてなかった。

「はぁ、なかなか見つからないね。」
「そうだね。いったん休憩しようよ。」

そういって正臣が近くの喫茶店を進める。
聖那もうなずいて喫茶店に入っていく。
外とは違って冷房がガンガンに効いていて正直寒いくらいだ。
アイスコーヒーとオレンジジュースを頼んで窓際のカウンターに座る。

「あー生き返る。」
「どうしようかね。」

「うん。」

そういいつつも内心どうでもいいやと思ってきてる二人。
オレンジジュースを吸いこみながら聖那はまた頭を回転させていた。
正臣は肘をついて外を見て人間観察をしていた。

「・・・そうだ。」
「ん？」
「サイモンの所なら木材があるかも・・・。」
「サイモンって・・・露西亜寿司の？」
「え・・・知ってるの？」
「だって店長は私の友達だもの！」

にっこりと笑う聖那。
正臣の頭には露西亜寿司の店長の顔が浮かぶ。
（へぇー。友達・・・なんだ。）
ちょっとぎこちない感じ。

「まぁ、あそこならなくもないかな？」
「でしょ？」
「それじゃ行こうか！」
「待って！もう少し休んでいこうよ。」
「・・・そうだね。」

正臣は浮き上がらせた腰をもう一度椅子におろしてアイスコーヒーを口にする。
外を見るだけで暑さが伝わってくる。

「なんかさー。」
「ん？」

「めんどくさい。」

正臣のその言葉に聖那のオレンジジュースを吸いこむ音が止まる。
硬直して正臣を凝視している。しかも変な顔で・・・。

「え？あ！ごめんね。せっかく二人できたのにねぇー。・・あ・・
ハハハハハ。」
「紀田君もそう思う？」
「え？」
「私も正直暑いからもう帰りたいなぁーって思ってたの。」
「そうなの？」
「うん。露西亜寿司には私からメールしておくから今日はこのまま
遊ぼう。」

にっこり笑う聖那。
今日一日でずいぶんと聖那の印象が変わったと正臣は思った。
いつも手紙をまわしてる時も一緒に学校にいるときも
「まじめで可愛い子」
まぁ・・・いわゆる杏里的タイプかと思っていた。
けど、全然違ってそこら辺にいる元気な高校生だった。
その笑顔が何よりもの証拠だ。

「じゃ、そろそろでようか。」
「うん。どこ行く？」
「プリクラでも撮る？」
「いいよ！」

そういって二人は椅子から腰を浮かして出入り口へと向かった。
外に出ると暑い空気が顔面に襲いかかった。
もわぁって感じの何とも言えない暑さ。

二人は口をへの字にして一歩後ずさった。
けど、仕方なく歩きだす。

「紀田くんっていつも竜ヶ峰くんと園原さんといるけど仲いいの？」
「ああ。帝人は小学校の時の同級生なんだ。」
「園原さんは中学で知り合って？」
「そう。杏里は可愛いよすごくね。」
「うん。可愛いよね。」

普通の女子と男子の会話に変化していきしだいに暑さも忘れてしまう。
そのムードを壊すものが出現するとも知らずに。
仲よ良さげに二人が話していると怒声が響いた。

「いぃぃぃざぁぁぁぁぁやぁぁぁぁぁ！！！！！」

その声は正臣にはとっても聞きなれた声だった。
振り向くとそこには・・・自販機を持った池袋の自動喧嘩人形がいた。
その横には池袋のいろんな事件の黒幕的存在の情報屋さんがいた。
二人が喧嘩してるのはここらではいつものこと。
でも、聖那は初めて見たのか目を輝かせて正臣に尋ねる。

「紀田君！あの人たち誰？」
「え・・・。金髪のほうが平和島静雄。もう一人の人は折原臨也だよ。」
「へぇー静雄に臨也か。珍しい名前だな。」

なんか余計目の輝きが増したように見えた正臣は聖那の腕を握った。
そして、そこから一刻も早く去ろうとした。

「どうしたの？紀田君。」
「危ないからさ！」
「そっか。うん。わかった。」

素直に聖那が聞いてくれて心底安心した正臣。だが、それは違った。
その安心が不安への引き金になった。

「あれ？正臣君じゃないの！」
「う・・・。」

嫌なあの声。
聞きたくなかった声。
正臣は聖那を後ろにして守るような体制で後ろを向いた。
にっこりと笑う臨也がいた。

「どうしたのこんなところで？」
「遊んでたんですよ。」
「へぇー。あれ？後ろの子は？」
「え・・・。」

気付くとは思っていたがあまり紹介はしたくなかった。
かといって聖那が自分から自己紹介するのではないかと内心びくついていた。
すると、案の定聖那が前にひょっこりと飛び出てきて臨也をまじまじと観察し始めてしまった。
正臣は慌てて眼を見開いた。
臨也も想像はしてなかったようでちょっと眉間をピクっと動かした。

「イザヤさんね・・・。珍しい名前ですね。」

ただそれだけ言うと聖那はにっこりと笑った。
臨也もにっこりと笑っていた。

「君の名前は？」
「イザヤさんはなんでもご存じでしょ？」
「なんでそう思うんだい？」
「だって・・・情報屋なんでしょ？」

二人は笑顔を絶やさずに話を進める。
聖那似正臣は一切臨也が情報屋ですとはいっていない。
なのに何故か知っていた。
正臣が疑問で仕方なかった。
が、その時だった。

「いぃぃぃざぁぁぁやぁぁぁぁ！！」

またも怒声が響く。
さっきまで存在すら忘れられてしまった静雄がこちらに向かってゴミ箱を投げようとしていた。
臨也は笑って聖那と正臣に手を振ると細い路地のほうへと逃げて行ってしまった。
静雄もそちらへとゴミ箱を投げて聖那と正臣に害はなかった。

「なんで・・・情報屋ってしってたの？」
「サイモンに教えてもらった。」
「じゃ・・・名前も知ってたの？」
「ううん。サイモンには黒髪でニタニタと笑った男には気おつけろ。あいつはなんでもお見通しの情報屋だ。って言ってたから。」
「そっか・・・。」

「早くプリクラ行こう。」

そういって聖那は手を引いた。
正臣は聖那のことを見つめながら、
（まだまだ聖那は謎だらけだな。）
と思って呆れた顔で笑った。

路地裏でニヤついた顔をしながら悲劇を描く情報屋には気づかず。

第二話　珍しい名前ですね（後書き）

あーがんばれ聖那ちゃんに正臣。

第三話　あ！金髪のお兄さん（前書き）

やっとの第三話です

第三話　あ！金髪のお兄さん

プリクラも終わって二人は暗くなってきたサンシャイン通りを歩いていた。

「このプリクラどこに貼ろうかな？」

プリクラをヒラつかせながら聖那は楽しそうな顔をしていた。
正臣はそんな笑顔を見て一緒に笑顔になる。

「学校の私物にでも貼っておこう。」
「駄目だよ。」
「え？」
「それがもし見つかったら僕を好きな女の子たちが嫉妬して聖那を苛めちゃうかもしれないからさ。」
「・・・ハハハハハ。その通りだね。なら・・・携帯に貼っておこう。」

そういうとポケットから黒の携帯電話を取りだした。
電池パックのところにシールを一枚貼りつけると満足そうな顔で笑って見せる。

「なら俺も。」

と正臣が携帯電話を知り出した瞬間聖那の声が響いた。

「ダメ！」
「え？」

あまりの怒鳴り声に正臣は目を丸くさせた。
聖那の瞳は悲しそうな瞳で正臣を見つめていた。
けど、はっとした顔になるとすぐに首を振ってさっきと同じ笑顔を振りまいた、

「なんでもないよ。」
「・・・そう。」
「それじゃ、私帰るね！」

そう叫ぶと聖那は返事も聞かずに走り去ってしまった。
あまりにも一瞬のことに正臣は聖那を止めることができなった。

「聖那・・・。」
「やぁー紀田君。」

いきなりかけられた声に正臣は勢いよく振り向いた。
そこに居たのは見覚えのある顔で正臣は暗い顔になった。

「どうも。臨也さん。」
「はぁーさっきはシズちゃんに殴られそうで危なかったよ。・・・そういえば、さっきの子は？」
「・・・。」
「あー帰ったんだ。いやー初めて“珍しい名前ですね”なんて言われたよ。」
「そうですね。」

臨也を無視して歩きだす正臣の背中を追うようにして臨也もあるきだした。

「もしかして彼女？」

「・・・違います。」
「だよねぇー。紀田君には沙樹ちゃんがいるものんねぇー。」
その沙樹という言葉に正臣の足が止まった。
「どうしたの？紀田君。」
「いや・・・なんでもないです。」
悲しげな声を発する正臣を見て臨也は予想通りと言わんばかりの笑顔でスキップをし始めた。
「まぁーいいんじゃないかな。そういえば・・・紀田君ってここいらに最近出てくる小さな打倒切り裂き魔ちゃんを知ってるかい？」
「打倒切り裂き魔？」
「そう。切り裂き魔に襲われる人を助けるのが打倒切り裂き魔。別名“愛を知らない子”。」
「愛を知らない子？」
電柱に手をかけてクルッと一周する臨也。
正臣の足取りもゆっくりと止められる。
「切り裂き魔は人を愛す。が、切り裂き魔を打倒する小さい子は愛を打倒してるのと一緒だ。だから、愛を知らない子なんだって。」
淡々と説明する臨也は楽しそうにそして狂ったように・・・。
正臣はそんな存在どうでもいいといった感じでボケーっとしている。
「まぁーもし切り裂き魔に襲われそうになったら会えるんじゃないかな？それじゃ！」

臨也は電信柱から勢いよく飛ぶとサンシャイン通りから消えて行った。

「愛を知らない子ね・・・。」

正臣がつぶやいたその瞬間彼の耳に馬の鳴き声がけたたましく聞こえた。
気付いたときには足が勝手に動いていてサンシャイン通りの通りを出たところにある道路へと出ていた。
遠くからすごいスピードで走ってくる黒いバイク。
都市伝説で有名な“首なしライダー”。
目の前を通り過ぎるだけでものすごい鳥肌と好奇心がわく。

「わぁ、首なしライダーの後ろに誰か乗ってるよ。」

誰かの言葉に何人かが反応して再度首なしライダーを見る。
確かに首なしライダーの後ろに黒いヘルメットをかぶった小さな子供が乗っていた。
正臣もその謎の同乗者に目を向けた。
黒いヘルメットをかぶった子供。その姿に見覚えはなかった。が、ヘルメットからのぞく赤い茶髪には見覚えがあった。

「罪鬼乃・・・。」

思わず声を漏らして名をつぶやいた。
その時、ヘルメットをかぶった個どがこちらを向いた。視線の先には確実に正臣がいた。
正臣の背筋が凍りついて冷汗が駆け抜けた。
が、バイクは止まることなく走り続けた。
気付けば正臣の前からバイクは消えて今の一瞬で起きたことがまる

で嘘のようにも思えた。

「・・・。」

しばらくの間押し黙り正臣はいつも通り路地へと入って行った。
路地に入るとポケットに入れておいた黄色いバンダナを取り出して首へと巻きつける。
冷酷で少々過激な黄金族へと早変わり。

「リーダー。またやられました。」
「そうか。ちゃんとおとしまえつけて来いよ。」
「はい。」

倉庫の中には同じようにバンダナをつけた男たちが集まっていた。
みんながいろんなところにバンダナをつけて少し高いところにいる正臣を見上げている。

「いいか。お前ら最近この辺でダラーズがうごめいているが手を出すんじゃねぇーぞ。いいな?」

忠告する正臣にまじめに耳を傾ける黄色い男たち。
が、その中でもぞもぞと動く一人の男。そいつは不満げな顔で、イライラした顔で正臣を見ていた。

「どうした?なんか意見があるなら言え。法螺田。」
「どうしたもこうしたもそんな奴らぶっ殺せばー。」
「馬鹿野郎!簡単に人を殺すな。」

あまりにも覇気のある怒声に法螺田も黙りこむ。けど、その顔はさっきとおんなじ顔であった。

「今日はこれで解散だ。いいか？くれぐれも手を出すなよ。」
念を押すように忠告すると正臣は倉庫を後にした。
また暗い路地を戻ってサンシャイン通りに出ようとした。
ポケットで携帯電話が揺れた。
一度外から触る。けど、それでも着信はやまなかった。
正臣はポケットからそれを取り出すと耳へとあてた。

「どうした？」
「リーダー！また現れました。あの女が！！」
「女？」
「昨日の女の子ッスよ！」
「！」

正臣はすぐに方向回転して倉庫へと走った。
頭から離れないほど気になったあの不思議な少女にまた会えると思うと聞きたいことがいっぱい頭に浮かんできた。
倉庫へと滑り込むようにして入ると正臣の目の前に見えた光景は・・・。
血溜だった。

「・・・。」
「あ・・・リーダー。」
「何したんだ？」
「あの・・・法螺田さんが・・・。」

さっきまで正臣がいた舞台の上で法螺田は煙のでていたと思わせる銃を少女へと向けて笑っていた。
強くこぶしを握って強い足取りで法螺田へと近づく。

「ハハハ。二度もこの黄金族のところに入ってくるなんてな！」
「てめぇ！！！」
思わず殴った。
悲しさなのか、イラついたのか、それともただ単に殴りたかったのか・・・理由は不明だけど殴った。
「痛ッ！」
「馬鹿野郎！こいつが何したって言うんだ！！仲間でも殺したか？罪歌のようなことをしたか！？してないだろ！なんで殺したんだ！！」
なんて言っているのか正直自分でもわかっていなかった。
けど、怒鳴り散らして法螺田に怒鳴り続けた。
その時、誰もが凍りついただろう言葉がこの部屋中に響いた。
「あ！金髪のお兄さん。」
無邪気な幼いそうな声がこんなにも似合わない空間で静かに響いた。
ゆっくりと正臣は振り向くとそこに立つのは血まみれになって笑っている罪鬼乃だった。
「罪鬼乃・・・。」
「どうしたの？なんか青ざめた顔してますけど。」
この状況を、今の状況をわかっていない罪鬼乃この空間で一番浮いているだろう。
血を何事もなかったように服でふき取ると走って正臣に抱きついた。

「恩返しもしてなかったし、名前も聞いてなかったからもう一度会いたいって思ってたんだ。そしたら、さっきバイクの後ろから見つけて目もあったからこれは運命ってやつなのかぁーって思ってたんだ。」

テンションを上げながら喋る罪鬼乃の声がただふわふわとその倉庫に浮いていた。
正臣はよかったと言わんばかりに笑うと頭をクシャリと撫でて質問の答えを口にした。

「紀田正臣。それが俺の名前だよ。」
「紀田正臣ね。おぼえた！正臣ね。正臣、正臣・・・まさおり？」

なんども正臣、正臣と口にして確認をしていた。
正臣はただ生きていたことに嬉しくて顔をほころばせた。
けど、隣に著とした殺気を感じて鋭い視線を向けた。

「いいか？次こいつを殺そうとすたら俺がお前を殺す。」

そういうと正臣は罪鬼乃の手をつかんで倉庫を後にした。

暗い路地裏で今度はゆっくりとした歩みで二人は他愛もない話をしていた。

「正臣ぃー。正臣は黄金族って所属の人なの？」
「ああ。そうだよ。罪鬼乃は？」
「私はね“全力で愛する者”っていう所属ぅー。」

にっこりと笑う罪鬼乃の言葉に聞き覚えはなかったしそんなのがあ

るとも思えない。
それでも、嘘とは思えなかった。

「へぇー楽しそうだね。」
「うん！でもね、私は今そこから逃げてるって感じかな。」
「逃げてる？」
「うん。色々とあってね。」

昔の自分が黄金族から抜けたことを思い出してそれ以上を問い出そうとはしなかった。

「まぁー今の時間だけは楽しくね。」
「そうだね。」
「じゃ・・・露西亜寿司へ行くぞぉー。」
「え！今から？閉まってるんじゃ・・・。」

と立ち止まる正臣を追い越して罪鬼乃はにっこりと笑う。

「あそこは私の家だよ。」
「え？」
「いつでもあいてるから来て。」

正臣は疑問を置き去りにされたまま罪乃木に手をひかれて露西亜寿司へと足を向けた。

露西亜寿司の前ではまだ小さな明かりがこぼれていてちらほらお客もいた。

「ほら。入ろうよ。」
「でも、お金ないし。」

「私おごりますよ。」
「いや・・・悪いし。」
「大丈夫。早く！」

そういって罪鬼乃は正臣の手を引いて露西亜寿司へと入った。

「イラッシャーイ。お！オカエリ。ん？オー紀田！」

出迎えたのはサイモンだった。
罪鬼乃は笑ってサイモンへと手を振る。そして、カウンターに入っていた店長に歩み寄る。

「ただいま。おじさん。」
「おかえり。罪鬼乃。」
「その名前はやめてってば。」
「そうだったな。おかえり。浬洙（りず）。」
「ただいまー。」
「浬洙？」

正臣が罪鬼乃をじっと見つめて首をかしげた。
サイモンも店長もキョトンとした顔で紀田を見るとゆっくりと罪鬼乃へと移動させた。

「ああ。言ってなかったね。私のもう一つの名前はね浬洙なの。」
「浬洙か・・・。」
「うん。罪鬼乃って言うのも私の名前だけどね。」
「いろんな浬洙がいるんだね。」

浬洙は首を縦に振るとカウンターの奥にあった個室へと足を移動させた。

靴を丁寧に脱ぎそろえることもなく個室の座敷に腰を下ろした。
正臣もあとに続いて靴を脱いで座敷に座る。

「何ニスル？」

あとからやってきたサイモンが二人に尋ねる。

「正臣は何か食べる？」
「えーと・・・じゃ、少しだけ。」
「わかった。じゃ、いつもの2人前。」
「リョウカイ。」
「あ！サイモン。おじさんにくれぐれもウニを入れるなって言っておいてね。」

本当に嫌いなのか口を尖らして言う。
サイモンは何も言わずにただうなずくだけだった。

「ウニが嫌いなの？」
「うん。あの卵のむにゅむにゅしたのがいやなの。」
「へぇー。そうなんだ。」

どうでもいい話をし終えるとそのあとは二人してだんまり。
特に話すことだってないから黙ることしかできない。
けど、とうとう口を開いたのは正臣だった。

「どうして毎回黄巾族にいるんだい？」
「えーとね・・・ある人を追ってきてるの。」
「あるひと？」
「その人は私のお母さん的な存在の人。」
「へぇ・・・。でも、そんなひと倉庫にはいなかったよ。」

「いいの。もうすんだから。」
「そっか。」

毎回毎回黄巾族の倉庫にいられては正臣もすこし困ってしまう。

「正臣。」
「ん？」
「迷ってるの？」
「え？」
「正臣は黄巾族には居たくないんでしょ？」

知られざる質問に正臣は穴があきそうなほど浬洙を見つめた。
浬洙はにっこりと笑いながら正臣を見ていた。

「浬洙は－。」

何かを言いかけて正臣はその言葉を飲み込んだ。
それを言ったらいけない気がしたし帰ってくる答えに予想もついていたし。

「それより、浬洙ってここに住んでるの？」
「うん。そうだよ！」
「お父さんとお母さんは？」
「居ないよ。」
「・・・そうなんだ。ごめん。」

話しを切り替えて笑おうと思ったのに正臣は地雷を踏んでしまったらしい。
浬洙は悲しがる正臣を見て明るい声でいった。

「悲しくなんかないよ！だって、おじさんもサイモンもいるもん！！それに―。」

浬洙は言葉を少し止めると正臣の手を握ってにっこりと顔をゆがませて笑った。
ギュッと強く手を握る。

「正臣がいるから。」

その言葉はどんな言葉よりも馬鹿らしいかもしれないけど、そんな言葉よりも素直で素敵だった。
正臣も思わずにっこりと笑って浬洙の手を握り返した。

「お待たせ。」

いきなり障子があいてサイモンが現れた。
浬洙は元の位置に戻ってウニの乗っていないほうを受け取っていた。
正臣は少し恥ずかしそうに受け取るとしたを向いたまましばらく微動だにしなかった。

「頂きます！」
「・・・うん。」
「正臣。」
「ん？」
「明日さー一緒に遊ぼうよ！」

いきなりの申し出に正臣はしばらく何かを考えた。
予定スケジュールでも開いたのだろう。

「うん。いいよ。いっぱい遊ぼう。」

「うん！」

精一杯の満面の笑みで答えを返すと寿司を口に入れた。

「・・・ッ辛！」

第三話　あ！金髪のお兄さん（後書き）

ちゅかれた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0211m/

拝啓　黄巾族へ　（正臣夢?長編

2011年4月12日18時50分発行